

# 千葉市台門貝塚出土の壺形土器について

折登 亮子

## はじめに

千葉市台門貝塚は、貝塚町貝塚群を構成する貝塚の一つとして知られている。今回報告する壺形土器は、『千葉市誌』（千葉市1953）に「釣手型土器（台門）」として掲載され、千葉市埋蔵文化財調査センターが収蔵している。この壺形土器は、関東地方の堀之内1式の特徴を持ちつつも、東北地方のものとよく類似している。また、胴部の欠損部が水平で、破断面には黒褐色物質が付着していることから、東北地方北部を主体として出土する「切断壺形土器」に関連する「転用切断」壺形土器に相当する可能性が高い（葛西2005）。このように珍しい特徴をもつ資料であることから、本土器について報告する。

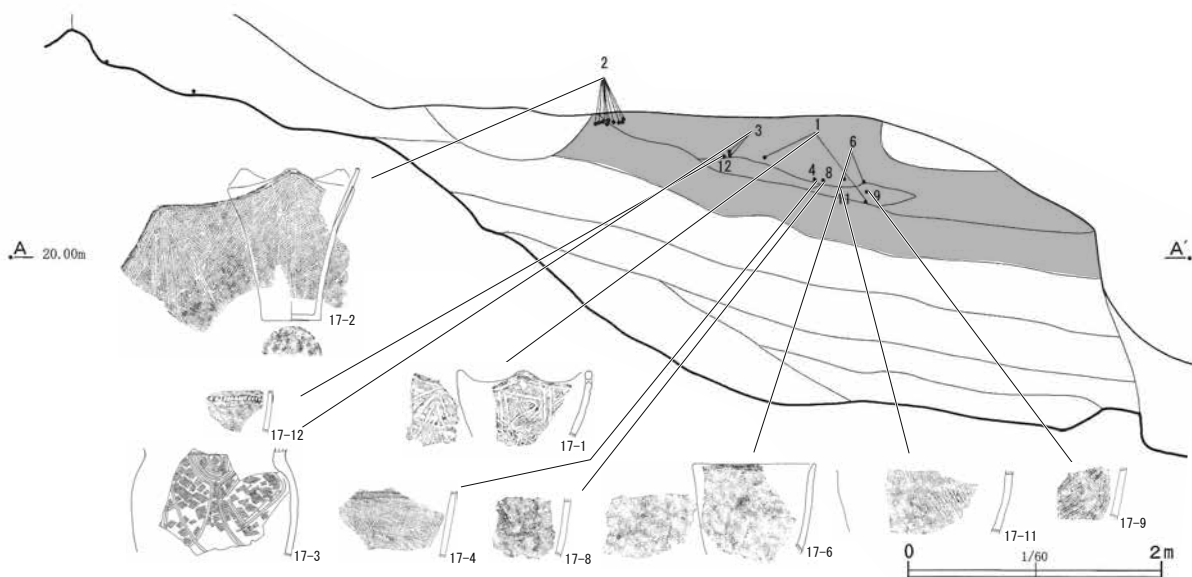
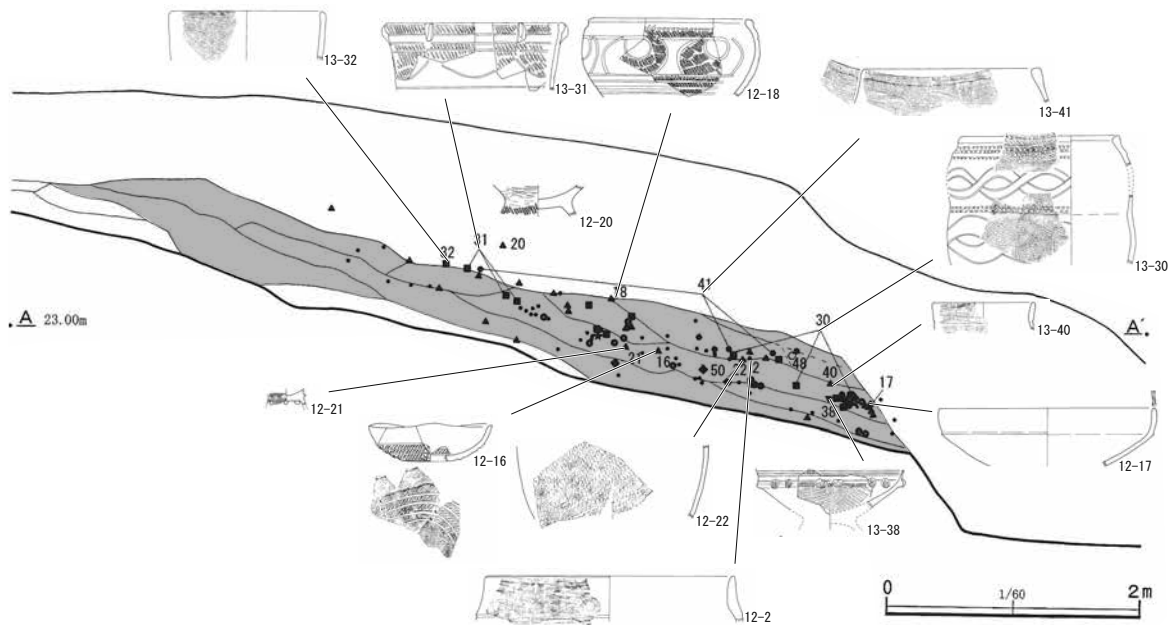
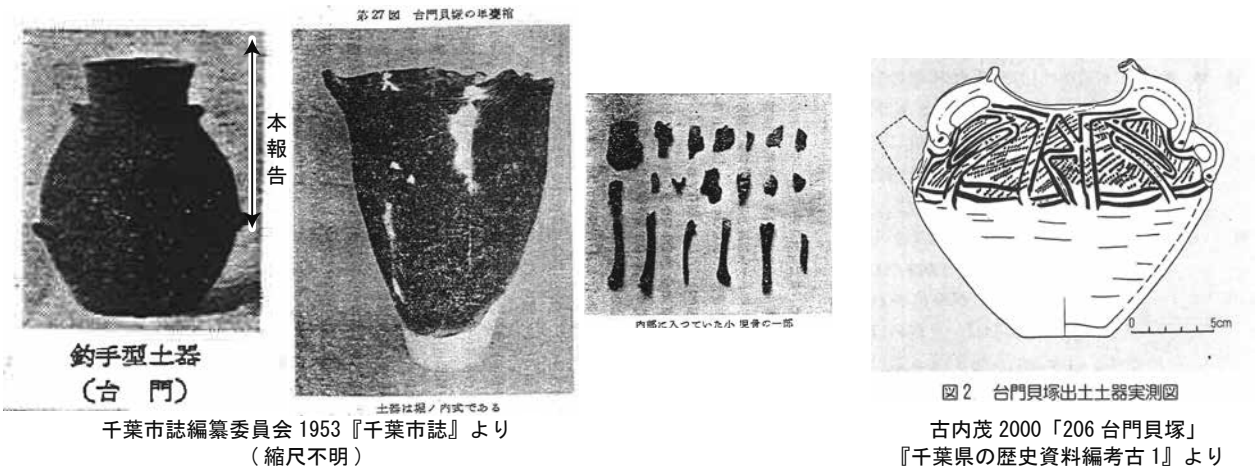
## 1 台門貝塚について（第1図）

台門貝塚は大規模な馬蹄形貝塚で、荒屋敷貝塚、草刈場貝塚等の貝塚により構成される貝塚町貝塚群の一つとして知られている（千葉市1953・1974、千葉県2000）。台門貝塚を含む貝塚町貝塚群の調査履歴については、田中英世により『千葉市台門貝塚―平成17・18年度発掘調査報告―』にまとめられている（田中2008）。それを元に、以下に調査履歴を述べる。

『人類学雑誌』第60巻第1号の会報には、1947年11月16日に東京大学理学部人類学教室員指導の元、人類学講座の聴講者100名により発掘調査を行ったと記載されている（日本人類学会1948）。酒詰仲男は1940年代から貝塚町貝塚群を踏査し、中～後期の馬蹄形貝塚であることを指摘している（酒詰1951）。

1953年、武田宗久らを主体として編纂された『千葉市誌』において、調査成果の一部が掲載される（千葉市1953）。第二章第一節第一項表中では、台門貝塚：縄文時代中期～後期・甕棺との記載がある。第三項第10図内には、「釣手型土器（台門）」として本報告の壺形土器が掲載されている。写真では胴部下半の突起以下から底面まで残存しているように見え、当時は底部が残存していたか復元されていたとみられる（第1図左上）。第三項第13図では台門・荒屋敷・草刈場貝塚の平面図が掲載されている。執筆者により、舌状台地上に密集する貝塚群という特徴から、狩猟等に際し「舟運の便を盛んに活用してかなり遠くの原野に迄も行っただろう」と指摘されている。また、第四項第27図内には、堀之内1式とみられる深鉢と、内部に収められていたとされる小児人骨の写真が掲載されており、表には「増田三男氏発掘千葉県立千葉第一高等学校蔵」とある<sup>(1)</sup>。

『千葉市史』には、1966年土取工事のため千葉県教育委員会により発掘調査が行われることとなったが、調査着手時には遺跡の大半が削り取られた後で、南端部の一角のみが調査されたとある（千葉市1974）。貝層を攪乱する古墳時代（鬼高式）の竪穴建物跡のほか、断面では縄文後期（堀之内式）、晩期（安行Ⅲb式）の竪穴建物跡と厚い貝層の露出を確認し、表面採集では堀之内式・加曽利B式が目立つこと等が報告された（後藤1974）。また、「2-21図 台門貝塚出土の注口土器＜千脇和茂氏蔵＞」として堀之内式期とみられる注口土器の写真と、重機により削平される状況の写真が掲載されている（宍倉1974）。この注口土器の実測図



千葉市教育委員会 2008『千葉市台門貝塚』を改変

第1図 台門貝塚の既報告遺物

は『千葉県の歴史』（千葉県2000）に掲載され（第1図右上）、当時の状況では西光院の境内内では貝層の一部が散見できたようである（古内2000）。

2004・2005・2006年には、道路拡幅工事のため千葉市教育委員会により発掘調査が行われた（（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター他2008）。その結果、A地点（調査区北側）では弥生時代、古墳時代後期、奈良時代の竪穴建物跡が重複して検出され、1966年の調査成果を裏付ける結果となった。また、B地点（調査区中央）ではⅠ区では斜面貝塚が露出しており、貝層からは中期～晩期の土器が出土した。層序の攪乱が認められるものの堀之内式、加曽利B式、曾谷式と縄文後期の破片が多く出土している（第1図中段）。Ⅱ区でも貝層が確認され、堀之内2式が多数を占める（第1図下段）。

これまでの調査成果をまとめると、本遺跡は縄文時代後期（堀之内式）、晩期（安行Ⅲb式）、弥生時代、古墳時代（鬼高式を含む）、奈良時代の竪穴建物跡、堀之内式期の深鉢の内部に小児人骨が収められていたことが確認されている。また、縄文後期を主体とする馬蹄形の貝層が形成されている。

## 2 台門貝塚出土の壺形土器について（第2図）

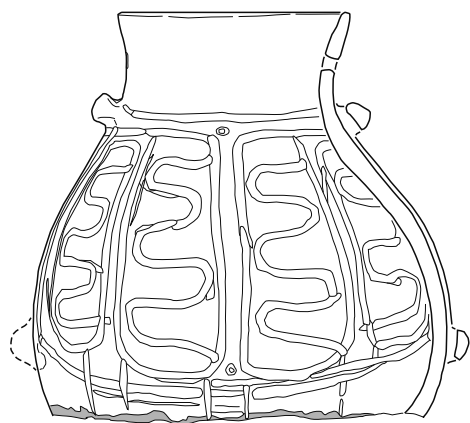
続いて、『千葉市誌』掲載の壺形土器について報告する。1953年に写真が掲載されていることから、前述の1947年の東京大学・人類学講座聴講者による発掘調査で出土した可能性がある。第2図に実測図を掲載した。口径9.2cm、残存する器高は（16.0）cm、胴部最大径は16.5cmを呈する壺形土器である。胴部下半～底部は残存しておらず、有孔突起は1単位のみ残存する。

口縁部は平縁・無文で、胴部文様との境界には横位沈線が施される。同じように胴部下半～底部も無文部になると推測され、その境界にも横位沈線が施されるが、縦位沈線に切られる部分がある（第2図実測図左）。胴部は、上下に有孔突起がつく2条の縦位隆帯により方形に区画される（実測図右）。区画内には2個1対2単位の縦位蛇行文が沈線で描かれ、蛇行文の間には円形刺突が施される（実測図左）。有孔突起の穿孔、縦位隆帯の間の沈線、口縁無文部の穿孔部が一連に繋がり、紐かけが可能なつくりとなっている（断面図）。突起上には1箇所のみ円形刺突が施され、左右非対称であり、両端に刺突をもつ沈線とはならない（実測図右）。沈線は幅広で断面形は方形に近く、やや浅く施文される。一筆書きでなく途切れるところや書き足すようなところがある。細い線が残る部分もあり（写真右下）、これらは下書き線が残存したもの可能性がある。

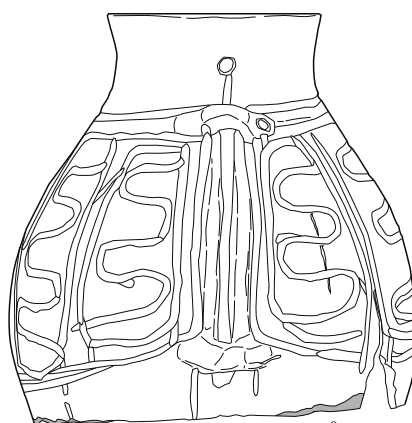
胴部下半で調整の痕跡が確認でき、全体的にミガキ調整で整えられる。器面の色調は黄褐色であるが、赤みを帯びる、黒色を呈する箇所もある。内面も同様丁寧なミガキ調整が施され、器面よりもやや褐色だが赤彩等によるものかは不明である。胎土は少量の白色粒や砂粒を含有し精緻で締まった印象を受ける。

胴部下半の欠損部は水平で、土器片利用円盤の周縁のように凹凸が確認され（写真左下）、意図的に打ち欠いた可能性が考えられる。輪積痕で剥がれた可能性もあるが、外傾・内傾接合の粘土帯は確認されない。破断面には黒褐色の付着物が厚く付着しており、破断面の凹みに詰まったような状態である。この付着物は一部器面にも付着している。塗膜のようにになっている箇所がみられ、黒みは弱く、若干の光沢をもち、肉眼観察ではアスファルトというよりは黒漆の印象を受ける。

前述したように『千葉市誌』刊行段階では底部が残存していたとみられる（第1図左上）。上記の付着物を接着剤として胴部下半～底部が接合していた可能性がある。一方、調査後の接合・復元に使用した接着剤の可能性も考えられるものの、当時から使用されていたセメダインC等の接着剤とは思えない。漆により



実測図



口径 : 9.2cm  
最大径 : 16.5cm  
器高 : (16.0) cm

0 S=1/3 10cm



破断面の黒褐色付着物



破断面周辺の器面の付着物



凹凸をもつ破断面（打ち欠きか）



破断面周辺の器面の付着物・下書き線？

第2図 台門貝塚出土の壺形土器

底部が接着していたとすれば、葛西勳(2005)の「切断壺形土器」に関連する「転用切断」壺形土器に相当し、これについては後述する。

### 3 関東地方の後期の壺形土器(第3図)

関東地方での壺形土器の出土例としては、東北の影響を受けた「切断壺形土器」の出土が以前より知られていた(阿部1985)。「切断壺形土器」は、かつて成田滋彦により「切断蓋付土器」としてまとめられたもので(成田1986・1999)、この土器について体系的な研究を進めた葛西勳は「切断壺形土器」と呼称しており、本稿ではこちらの呼称を採用した(葛西1974・2005)。

阿部芳郎は切断部の特異性から「分布圏から直接的に搬出されたものではない」とし、「隣接する異なった土器型式の分布圏に順次搬出され、本来的な機能を逸脱しない範囲での型式変化を伴いながら、各々の地域で模倣されるという搬出形態」と指摘した。その後、斉藤弘道は南三島遺跡例を堀之内1式期に位置付け考察し(斎藤1987)、大内千年は鎌ヶ谷市向山No.1遺跡例についてヒゴ切断+突起上に2個の刺突を短い沈線で結ぶ堀之内1式期の文様から、本場の手法を知る人が在地で模倣したと考察した(大内2007)。

出土事例を集成したところ(第3図)、①そろばん玉形の器形が多い、②切断部の上下に穿孔をもつものが多い、③肩部に2または4単位の縦位隆帯+突起、口縁・胴部下半は無文となるものが多い、という複数の共通する属性が認められる。阿部・大内が指摘するように、東北地方北部のものとは異なる特徴を持つことから、関東地方でも製作されていたとみられる。ヒゴ切断は大洗町大貫落神貝塚<sup>(2)</sup>、さいたま市黒谷田畑前遺跡、鎌ヶ谷市向山No.1遺跡、千葉県加曽利貝塚で認められるものの、その他はヘラ切断や分割して製作されたとみられ、ヒゴ切断の割合が低いことも東北北部とは異なる。時期は堀之内1式と報告されたものが大半である。岩手県滝沢市卯遠坂遺跡例は、器形・文様が上記の関東地方例に類似する例である。

上記の事例に関連する2例がある。千葉市上ノ山遺跡例は、千葉市内では後期の壺形土器の出土が少ない点、突起・穿孔・2条1組の隆帯(両端沈線)等から、東北の切断壺形土器の影響を受けたとされ、水平な胴部破断面にも注目された(長原2017)。同市矢作貝塚例は「転用切断」壺形土器の可能性が指摘されている(大内2007)。

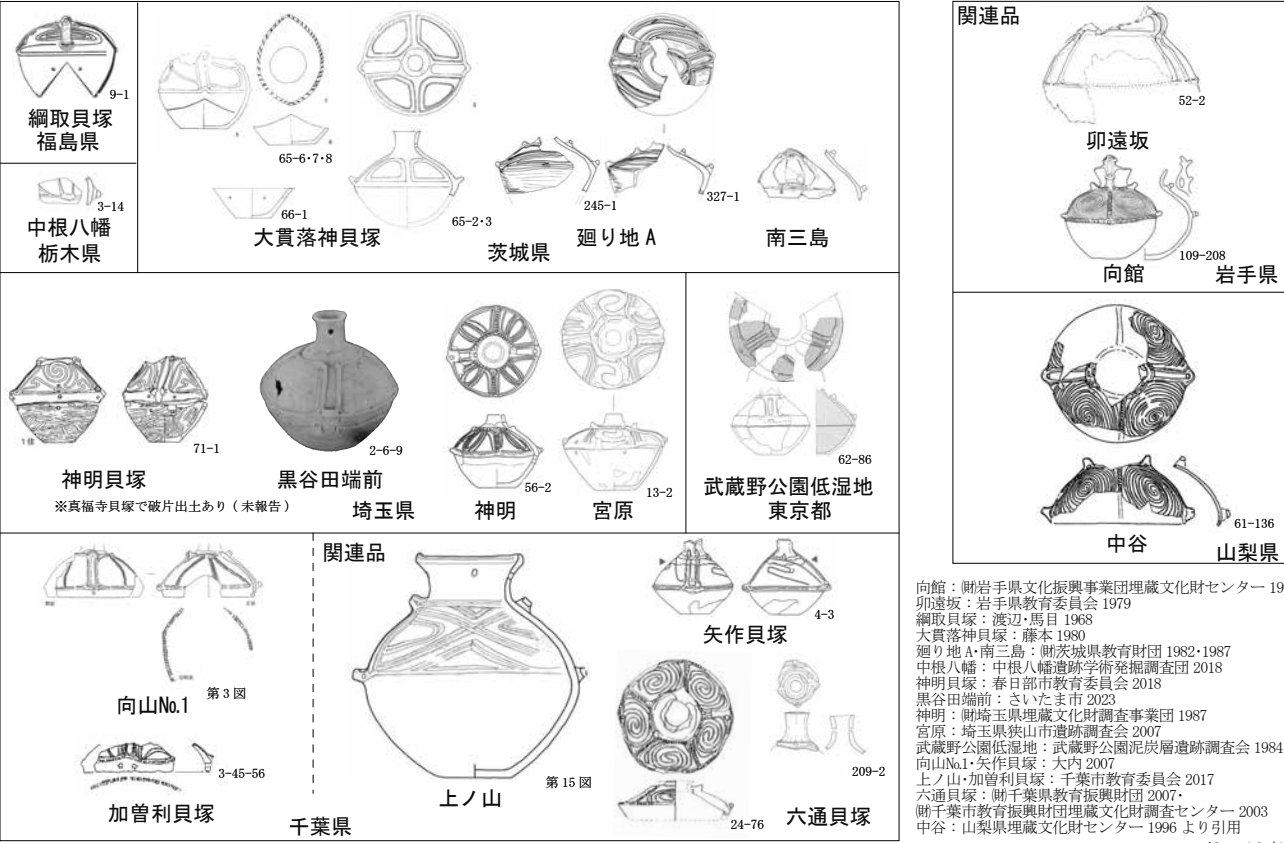
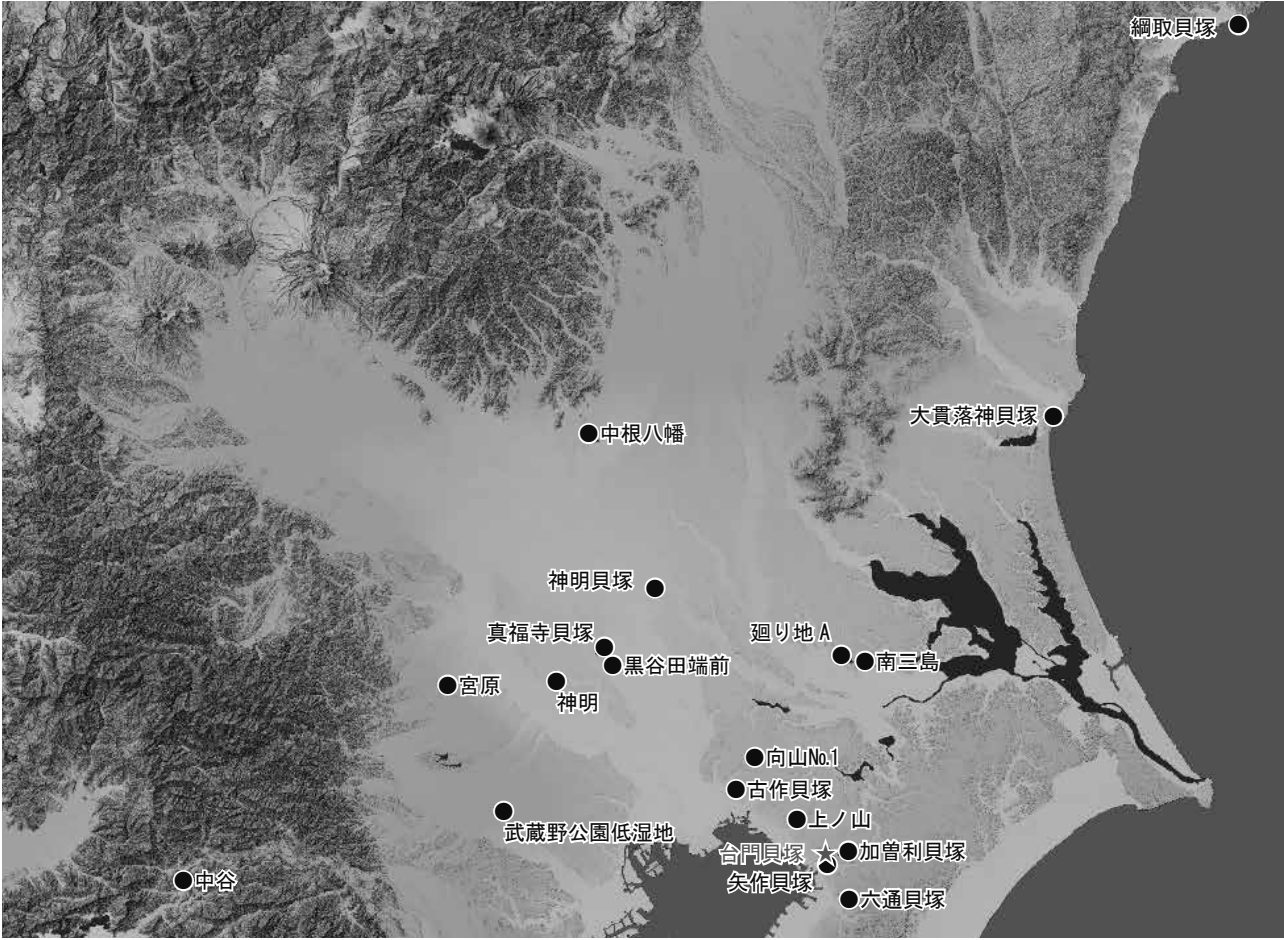
切断壺形土器の可能性があるものは、千葉市六通貝塚例、山梨県都留市中谷遺跡の2例がある<sup>(3)</sup>。細い隆帯+刺突による縦位区画内に渦巻状の沈線が施される共通点をもつ。隆帯上の刺突はさいたま市神明遺跡例や千葉市加曽利貝塚例、鎌ヶ谷市向山No.1遺跡に、渦巻モチーフは春日部市神明貝塚、狭山市宮原遺跡に共通する。切断はされていないが、文様が類似する壺形土器が岩手県盛岡市向館遺跡にある。

第3図のように、台門例はこれまで出土した関東地方の切断壺形土器やその関連品には類似せず、東北地方との関連が強いものと考えられる。

### 4 壺形土器の時期的・地域的位置づけ(第4図)

台門貝塚ではこれまで縄文中期～晩期の遺物が確認され、その中では堀之内式期の遺構・遺物が多いことは前述した(第1項)。しかし、本土器の出土位置や時期は確定できておらず、他に出土した遺物も確認できていないため、出土状況から本土器の時期を決定することは難しい。

土器の属性からは、胴部文様は堀之内1式期の深鉢に盛行する縦位蛇行文と、壺に盛行する縦位隆帯であり、後期前葉の堀之内1式に属する可能性が高い。その一方、前項でみたように蛇行文や器高が高く胴



第3図 関東地方の壺形土器出土事例と関連事例

部下半に最大径をもつ壺は関東地方に伴わない(第3図)。

唯一確認した類例は、器種は異なるが千葉市大膳野南貝塚の縦位隆帯+蛇行文が施される注口土器である(第3図右上)。称名寺式・堀之内1式土器出土のJ104号住居址から出土しており、堀之内1式と報告されている。また、内面の胴部中位に漆の付着痕跡があることが指摘されている。

本土器と文様・器形が類似する壺形土器が多く確認できるのは、縄文時代後期前葉、青森県弘前市十腰内(2)遺跡を標識とする「十腰内文化圏」(東北北部)や、岩手県陸前高田市門前貝塚を標識とする「門前文化圏」(東北中部)(鈴木2013)においてである。

十腰内文化圏では、器形が類似するものは後期初頭～前葉にかけて多数出土しており、台門例に類似する一例として、七戸町大平遺跡出土の切断壺形土器を挙げた(第4図)。縦位隆帯区画内に沈線文で蛇行文に似る方形モチーフが描かれ、底部付近はヒゴ切断により切断される。伴出した粗製系の深鉢土器からは後期初頭新段階～前葉の土器とみられる。文様の類例は、青森県域の後期初期には縦位隆帯は一般的であるが、蛇行文の使用は低調である。後期前葉には、鷹架遺跡・小牧野遺跡等で少数あるが、縦位隆帯が伴わず、蛇行文の間隔は狭く気風も異なる。

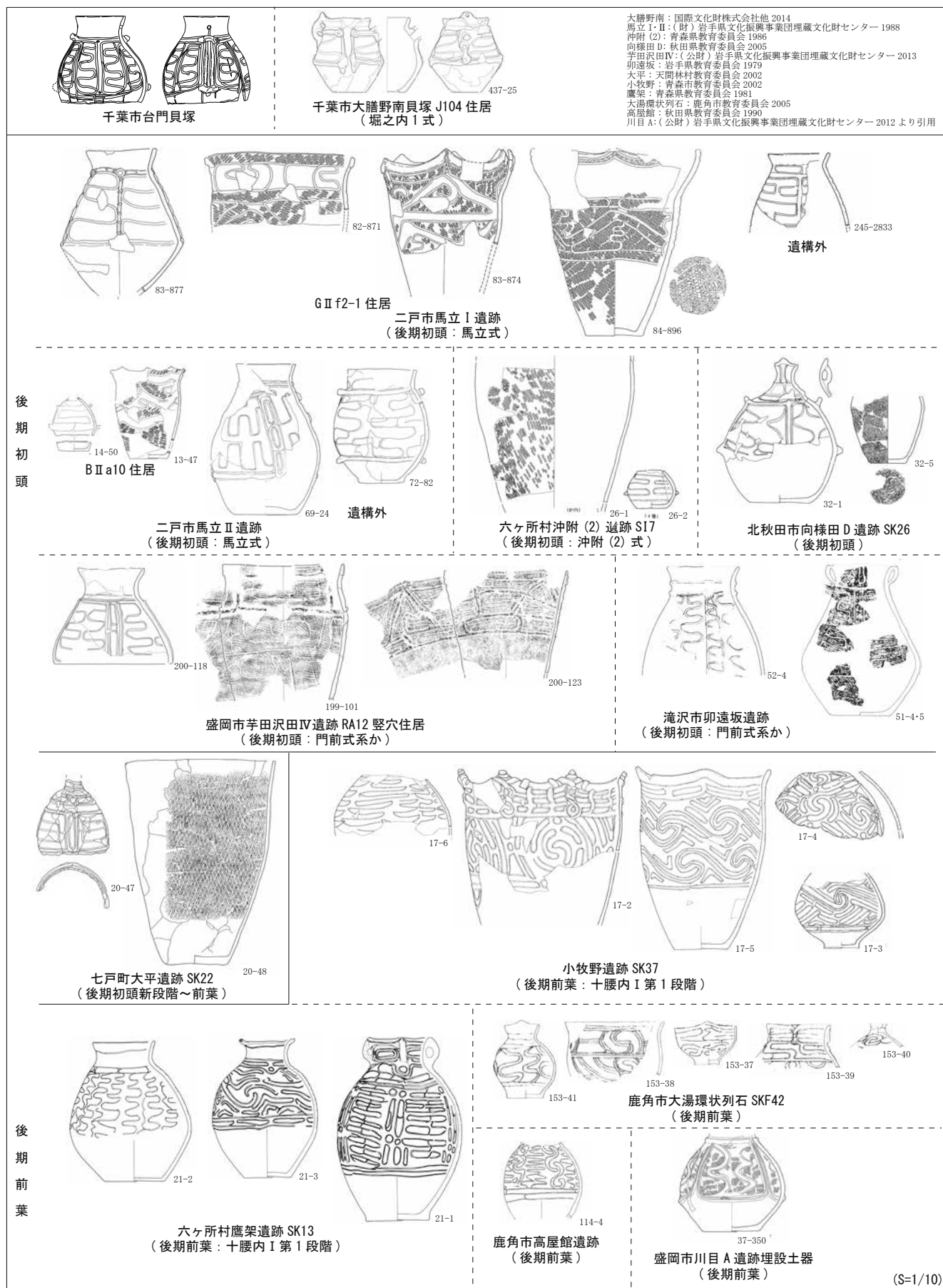
一方、十腰内文化圏に含まれる岩手県北部の二戸市馬立Ⅰ・Ⅱ遺跡では、後期初頭新段階(弥栄平(2)式・沖附(2)式(成田1989)・馬立式(鈴木2001)に相当、蛭沢式(本間1987・1988)の一部に相当)で蛇行文の壺形土器が複数出土しており(第4図中)、十腰内文化圏内でも蛇行文の盛行度合いには地域差があるようだ。榎本剛治は十腰内文化圏に属する北秋田市伊勢堂岱遺跡出土の縦位蛇行文の深鉢形土器について、地文縄文の手法から十腰内Ⅰ式直前段階に位置づけ、蛇行文は東北地方北部の系統ではなく、岩手・秋田県域の内陸部の資料に由来する可能性を指摘した(榎本2005)。内陸部の資料として挙げたのは、北秋田市日廻岱B遺跡例(菅野2005)、同市砕瀨遺跡例であり、これらの土器群について、鈴木克彦が門前式とは別系統の土器群として設定した「湯舟沢A式」(鈴木2000)の範疇とした。湯舟沢A式の標識資料や、滝沢市卯遠坂遺跡例には蛇行文が多く採用される(第4図中段右)。北秋田市向様田A遺跡例もその一つとみられる。

この湯舟沢A式がみられる岩手県域中部は、十腰内・門前文化圏の境界で両者の影響を強く受ける地域で、台門例に非常に類似する盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡例がある(第4図中段左)。観察表には切断壺形土器と表記されている。実見したところ、残存部がごくわずかで不明瞭であったが、ヘラ切断後に焼成されているようにも見える。4単位の縦位隆帯区画内に2個1対の縦位蛇行文が施され、色調・胎土の雰囲気はよく似る。差異としては、沈線が幅狭で細く消えかかっている箇所があることと、台門例は縦位区画が2単位であることが挙げられる。共に出土した深鉢は後期初頭～前葉のものを含むが、周辺事例(室野1995など)と比較すると後期初頭新段階に属するものが多そうである。

よって、台門例の東北地方の類例は、十腰内Ⅰ式直前段階の後期初頭新段階、特に岩手県域での出土例が多いことがわかった。東北地方と関東地方の併行関係についての先行研究からすると、やや古い可能性もあるものの、概ね堀之内1式と併行すると思われる(『総覧縄文土器』表、宮城県考古学2022など)。

## 5 「転用切断」壺形土器と接着事例(第5図)

葛西は、「ごく少数ではあるが焼成後に胎土の繫目から切り離した土器がある。(中略)本来別の用途で製作された土器を転用した可能性が考えられ、この種の土器を仮に転用切断としておきたい。」とし、例として青森県五戸町薬師前遺跡を挙げ「薬師前遺跡の土器棺はこの方法による切断である」と、「転用切断」壺



第 4 図 東北地方における台門貝塚の類例 (器形・文様)

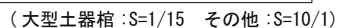
形土器とその技法について定義した。薬師前遺跡の1号棺受け容器と2号棺の覆い容器は同一個体であり、2号棺の受け容器は肩部で欠損したものを用いている。他例としては、破断面に黒色物質が付着する青森市稲山遺跡、弘前市十腰内(2)遺跡を挙げ、付着物はないものの胴部上半を欠失し住居床面から出土した二戸市矢神遺跡のものもその可能性があると指摘した(葛西2005、図4)。稲山遺跡例を実見したところ、焼成前に行われるヒゴ・ヘラ切断技法は確認されず、破断面となっている部分にアスファルトとみられる付着物が確認され、典型的な「転用切断」壺形土器とみられる<sup>(4)</sup>。

上述したように、台門貝塚出土の壺形土器は、焼成後に胴部下半を意図的に打ち欠いて割った可能性があり、破断面には黒漆とみられる物質が付着していることから、「転用切断」壺形土器との類似性が指摘される(第3図)。この「転用切断」技法や接着の類例についてみていく。

まず「転用切断」技法例をみていく。葛西(2005)が「ごく少数」の出土とする十腰内文化圏内でも、切断部を持たずに作られた壺形土器を焼成後に敲打等で切断したと思われる土器は一定数出土している(第5図)。青森市中平遺跡330号土坑例は、正立で埋設された壺形土器内に、壺の口径より最大径が大きい小型鉢が入った状態で出土し、「何らかの方法で壺を破壊し、鉢を中に入れたと推測される」(佐藤2009)ものである。実見すると輪積痕の水平な欠損部が数箇所あり、特に上部と下部のものは切断壺形土器の「上方切断」「下方切断」(葛西2005)の位置に相当する。鯉ヶ沢町新沢(2)遺跡例は、肩部の輪積痕で水平に割れているが、破断面の周辺に凹凸がみられる。ほか、九州国立博物館所蔵の十腰内Ⅰ式の壺形土器の破断面は、「上方の割れ口は角が少し取れ、下方の割れ口はシャープであり、時間差が考えられる」と指摘されている(九州国立博物館)。矢神遺跡例のように欠損状態で出土した例も多く、青森市小牧野遺跡例は薬師前遺跡例と同じく故意に欠損した土器を組み合わせで埋設する(青森市教育委員会1996・葛西2002)。むつ市一里小屋遺跡例は破断面の調整が指摘され(葛西2002)、観察すると凹凸があり敲打痕に見える。同市内田(1)遺跡例は破断面が水平で、破断面～肩部内面に帯状に赤化粧土が付着し、「内側に残存する赤色粘土は、封をする意識がみられることから土器棺としての利用が考えられる」と指摘されている(加藤2018)。

続いて切断部の接着例をみていく。代表的な例として、六ヶ所村大石平遺跡例がある(国指定重要文化財)。漆での目張りや紐による固定が指摘されていたが(青森県埋蔵文化財調査センター1992)、実見するとヒゴ切断部の周辺のみ赤色顔料が剥がれ、顔料とは別の黒色物質(黒漆か)が付着しており、接着の痕跡が明らかに認められた。また、突起穿孔と底面のキザミ(スリット)が延長線上にあり紐が掛けやすい作りとなっていて、切断壺形土器の用途としてこのように強く接着・固定する意識があったことを思わせる。この大石平遺跡例は分析されていないが、これまでに接着剤の成分が判明した例では、青森市稲山遺跡の「粘着性の強い土壌」(児玉2004)、大湯環状列石の「粘土を何らかの膠着材に混ぜたもの」(赤沼1993)、青森市新田(2)遺跡のアスファルト(青森県教育委員会2009)がある。肉眼観察で観察した事例はそれぞれ、アスファルト：合名沢遺跡、黒漆：小牧野遺跡、黒色物質：稲山遺跡・三内遺跡<sup>(5)</sup>・三内丸山(6)遺跡、化粧土等粘土：蛍沢遺跡・尻高(4)遺跡・内田(1)遺跡、赤色顔料<sup>(6)</sup>：蛍沢遺跡、と推定される。その他、東北町歴史民俗資料館には、「下方切断」で漆による接着と解説される切断壺形土器が展示されている。

このように見てくると、門前文化圏では不明瞭だが、少なくとも十腰内文化圏や境界域では「転用切断」技法は一定数確認され、技法として定着しているといえる。台門例もこのような東北北部の技法を用いた例とみられる。同様に接着例も相当数確認された。一方、台門例は肉眼観察で黒漆と判断したものの、これまで漆の使用が確定した例はなく、こうした接着剤の内容については、今後分析が必要である。



第5図 東北地方における台門貝塚の類例（「転用切断」・接着）

## おわりに

千葉市台門貝塚出土の壺形土器は、関東地方堀之内1式に伴う可能性が高いが、東北地方の影響が強いことがわかった。さらに、台門例の類例や切断壺形土器の類似性からは、千葉県域と岩手県域の深い関係性を想定できる。

本例に先行する青森県三沢市猫又(2)遺跡では、大木10式・牛ヶ沢(3)式期の住居から称名寺式土器が出土し、菅谷通保は関東地方で作られたものが海上ルートで運ばれた可能性もあると指摘している(菅谷2013)<sup>(7)</sup>。また、福島県会津坂下町大村新田遺跡では「葦窪式」とみられる土器が、千葉市市原市菊間手永遺跡では東北北部の特徴をもつ土器が出土している(本間2023)。こうした事例や、前述した台門例の類例は太平洋側に多く、猫又(2)遺跡のように太平洋沿岸部に立地する遺跡もあるが、内陸部の遺跡もある。交流の実態については今後の課題である。

＜謝辞＞ 台門貝塚出土土器の調査に際しては、千葉市埋蔵文化財調査センター西野雅人氏・小林嵩氏に大変お世話になりました。特に、西野氏には急なお願いにも関わらず資料調査にご対応いただき、関東の事例についてご教示いただきました。関連資料の調査においては、青森市教育委員会児玉大成氏・設楽政健氏、青森県立郷土館齋藤岳氏・杉野森淳子氏、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター金子佐知子氏・星雅之氏、岩手県立博物館金子昭彦氏・高木晃氏にご対応いただきました。文献や事例の収集に際しては、阿部昭典氏、永瀬史人氏、中村耕作氏、成田滋彦氏、本間宏氏にご教示・ご対応いただきました。そのほか、長谷川大旗氏、三浦一樹氏にご協力いただきました。記して感謝します。

## 註

- (1) 千葉県立千葉第一高等学校は現在の千葉県立千葉高等学校であるが、学校や増田三男氏については調べられていない。
- (2) 66-1例は報告では輪積痕のキザミとされたが、一方で穿孔については注視されていた。写真観察ではヒゴ切断に見える。
- (3) 六通貝塚例は西野雅人氏、中谷遺跡例は阿部昭典氏のご教示による。
- (4) 後期中葉以降は注口部等でアスファルトを用いた修復事例があるが、後期初頭～前葉に輪積痕で修復する例は少ないと思われ、修復に関連するものでなく切断壺形土器の接着に類似する事例と考えた。
- (5) 成田滋彦は三内遺跡例について顔料塗布後の被熱による接着と指摘した(成田1986)。
- (6) 顔料のみでの接着は困難でないかと思われ、化粧土・粘土が剥落したものや、封をするイメージの装飾の可能性もある。
- (7) 鈴木徳雄によれば、「称名寺Ⅱ式」の茨城県の土器の可能性があるという(菅谷2013)。また、本土器は胎土分析を試みたものの、火山ガラスが検出されず分析されなかった(関根・近藤・柴2020)。

## 引用・参考文献 ※紙幅の都合により報告書については割愛した。

- 青森県埋蔵文化財調査センター 1992『図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ②青い森の縄文人とその社会縄文時代中期・後期編』
- 赤沼英男1993「2. 大湯環状列石出土土器付着黒色物質の分析」『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)』鹿角市文化財調査資料45
- 阿部芳郎1985「持ち運ばれる土器「切断壺形土器」の移動と地域間交流」『季刊考古学』第12号
- 「総覧縄文土器」刊行委員会2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 榎本剛治2005「秋田県における湯舟沢A式土器の検討」『北奥の考古学—葛西勳先生還暦記念論文集—』
- 大内千年2007「鎌ヶ谷市向山No.1遺跡出土の縄文時代後期・「切断壺形土器」」『鎌ヶ谷市史研究』第20号
- 葛西勳1979「十腰内I式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号

葛西勳2002『再葬土器棺墓の研究 縄文時代の洗骨葬』

葛西勳2005『再葬土器棺墓の研究 切断壺形土器と子供の再葬を考える』

加藤渉2018「第5章総括第1節縄文時代(2)遺物1縄文土器・土製品」『内田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第592集

菅野美香子2005「第6章 まとめ」『日廻岱B遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第394集

九州国立博物館「収蔵品ギャラリー 壺形土器」(<https://collection.kyuhaku.jp/gallery/15070.html>)

児玉大成1999「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号

児玉大成2004「補遺」『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書第72集

児玉大成2013「第Ⅰ部時代概説 2土器の編年 第1節縄文後期」『青森県史資料編考古2 縄文後期・晩期』

後藤和民1974「五 縄文晩期の遺跡 Ⅲ 台門貝塚(貝塚町台門所在)」『千葉市史 原始古代中世編』

酒詰仲男1951「地形上より見たる貝塚(殊に関東地方貝塚について)」『考古学雑誌』第37巻1号

斉藤弘道1987「g 切断壺形土器について」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16—南三島遺跡3・4区(Ⅰ)—』茨城県教育財団文化財調査報告第44集

佐藤智生2009「第3章 遺構・遺物 第3節 土坑」『中平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第474集

宍倉昭一郎1974「第二項石器時代の遺跡 2縄文時代の遺跡の分布」『千葉市史 原始古代中世編』

菅谷通保2013「第Ⅴ章 青森県三沢市猫又(2)遺跡出土の称名寺式土器について」『猫又(2)遺跡Ⅲ』

鈴木克彦2000「岩手、秋田県北部の後期初葉土器の編年—湯舟沢A式の設定と提唱—」『岩手考古学』第12号

鈴木克彦2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』

鈴木克彦2013「第Ⅰ部時代解説 1分布圏と文化圏」『青森県史資料編考古2 縄文後期・晩期』

関根達人・近藤美左紀・柴正敏2020「火山ガラス分析を用いた南部地方の土器の胎土に関する基礎的研究」『研究紀要(八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館)』第9号

高木晃2003「館蔵資料紹介 切断蓋付土器(浄法寺町合名沢遺跡 小田島コレクション)」『岩手県立博物館だより』No.99 2003. 10

田中英世2008「Ⅶまとめ」『千葉市台門貝塚—平成17・18年度発掘調査報告—』

千葉市1953『千葉市誌』千葉市誌編纂委員会

千葉市1974『千葉市史 原始古代中世編』千葉市史編纂委員会

千葉県2000『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』県史シリーズ9

長原亘2017「なぜ市内から東北系の縄文土器が・・・」『平成28年度千葉市遺跡発表会要旨』

成田滋彦1986「切断蓋付土器考—東北地方の資料を中心に—」『弘前大学考古学研究』第3号

成田滋彦1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4

成田滋彦1999「異形土器 切断蓋付土器—出土状態と器形を考える—」『研究紀要(青森県埋蔵文化財調査センター)』第4号

日本人類学会1948『人類学雑誌』第60巻第1号

古内茂2000「206台門貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』

本間宏1987「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第3号

本間宏1988「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第4号

本間宏2023「会津盆地西縁における葦窪式土器出土の意義」『福島考古』第65号

宮城県考古学会2022『宮城考古学』第24号

室野秀文1995「Ⅲ 調査のまとめ」『大葛遺跡 第1次発掘調査報告書』

山崎真治2004「千葉県史編さん収集資料」『千葉県の歴史 資料編考古4(遺跡・遺構・遺物)』